

第74回 中部日本高等学校演劇大会 愛知県大会 上演日程

日程	上演校	地区	創作	演目	作者
8/5 ①	梶山女学園	名2		G線上のエリア	紗乃みなみ
(木) ②	誠信	尾張		ハンナのかばん	いずみ凜
③	豊野	西1		Take Me Deeper!!!	名古屋南高校演劇部
④	聖霊	名1	○	星が海に満ちる時 —銀河鉄道幻想紀行—	瀬戸山光子
8/6 ①	名古屋西	名4		サブマリಂಗールZ	品川浩幸
(金) ②	藤ノ花女子	東三	○	Tomorrow is another day.	武田郁子＋花ちゃんズ
③	大同大大同	名3		アキラ君は老け顔	國吉咲貴
④	鶴城丘	西2	○	青いひまわり	鶴城丘高校演劇部
8/7 ①	愛知	名1		牡丹燈籠	三遊亭圓朝
(土) ②	岡崎学園	西1		リーちゃん三世	常住奈緒
③	常滑	知多		笑ってよ ゲロ子ちゃん	兵藤友彦
④	一宮	尾張	○	こんばんは、太陽	一宮高校演劇部
8/8 ①	名古屋南	名3	○	追憶のステラ	名古屋南高校演劇部
(日) ②	刈谷東(昼定)	西2		笑ってよ ゲロ子ちゃん 殉情編 ～高校演劇バージョン～	兵藤友彦
③	旭丘	名2	○	水面の月	林咲良
④	桜丘	東三	○	ラスト・パス	松岡一夫
8/9 ①	尾北	尾張		話半分	郷原玲
(月) ②	日本福祉大学付属	知多		答辞	千葉和代
③	愛知芸術高等専修学校	名4		臥薪 SHOW 誕！ -REVENGE-	ベルべる☆
開演時刻 ① 10:10 ② 12:20 ③ 14:30 ④ 16:40					

■講評

○生徒講評委員 各地区代表1名 計9名

◆講評・審査

○顧問講評委員

春日井西(名2)古谷沙羅

吉良(西三2)阪口文博

大府東(知多)岩田吉生

南陽(名4)大島一夫

三好(西三1)臼杵秀一

福井県代表(県外)高野和樹

○専門家助言者

鹿目由紀(劇作家・演出家)

川上珠来(俳優)

井上知也(舞台監督)

(敬称略)

梶山女学園高等学校	G線上のエリア
この作品は、自分に嘘をつき周囲に「良い子」を演じている主人公が、葛藤を繰り返して成長することで、自分にも相手にも素直に向き合うようになっていくというもので、「自分の気持ちをさらけ出す」ことの大切さが伝わってくるものでした。 キャストの演技については、時々挟まれるコーラスや歌のクオリティーが高く、効果的でした。一方で、ギャグシーンでは滑舌や発声の関係でわかりにくい台詞がありました。伝えるべきポイントを明確にすることで、より良くなるのではないかという指摘がありました。 演出については、ダンスを取り入れていた、音楽や歌がよく生きていたという意見があった一方で、最初のダンスについては劇全体の中での意図がくみ取りづらいという意見も出ました。また、どこからが現実で、どこからが主人公の空想なのかということが分かりにくく、主人公の心情変化についても曖昧な印象があったため、変化のカギを握っている男の子の重要性がもう少しわかるよう演出できると良かったのではないのでしょうか。同様に、台本を潤色して、最も伝えたいことを明確にすることで、主人公の心情変化をより明確にする工夫があるとなお良い劇になったのではないかという意見も出ました。 装置については、緞帳が上がった瞬間に目を引き付けるクオリティーの高さであったが、それが十分に活かしきれていないのではないかという指摘がありました。例えば、ドアとして使われているパネルの角度の問題で、隠れている登場人物の一部が大きく見切れてしまっていたので、置き方や立ち位置に工夫が必要だったのではないのでしょうか。また、椅子の種類が全て違うのには意図があるはずであるが、それが十分に伝わってこず、引っかかったまま終わってしまったという指摘もありました。また衣装小道具とも関係するが、主人公以外が土足で机やいすは学校のものであることで、場所の設定が分かりづらく、そのために「靴脱いで」という台詞の重みがあり伝わらなかったという意見もありました。 照明についてはシンプルながら時間を巻き戻す場面の照明などよく工夫されていました。音響は既述のように歌や音楽を有効に使えていた一方で、恐らくタイトルからして最も重要であろう「G線上のエリア」が流れる場面が、劇全体の中で盛り上がり切れていないという意見がありました。 台本の面でも、そこで描かれている時代が少し前のものであり、特に高校生には伝わりにくいところがありました。また、途中でジェンダーに関連する台詞があったが、この台本が書かれた当時であれば何気ない台詞であっても、現代から見るとそこで引っかかってしまったので、台本については、現代に合わせて潤色した方が良いのではないかという指摘がありました。また潤色するのであれば、この台本の内容はSNSが隆盛している現代にこそあてはまる部分も多かったもので、そこに焦点を合わせるようにもできるのではないかという意見も出ました。 今の私たち自身も、人によく見られる為、あるいは一人にならない為に、つい自分自身を偽って人と関わるという経験を日常的にしているので、自分自身にあてはめてみることができ、観客一人一人に自分とは何かを問いかける劇でした。 梶山女学園高校の皆さん、お疲れさまでした。	

聖霊高等学校	星が海に満ちる時—銀河鉄道幻想紀行
「神秘的な雰囲気のある芸術作品」と言える劇でした。舞台という場所はこんなこともできるのかと、演劇の表現力の幅を再考させられました。死生観を漂わせる描写が素晴らしかったです。“本”は記憶を思い出すためのアイテムですが、それは主人公の「人生の記録」でもあると感じました。舞台は釜山から海、そして電車、海に変わり、一つの完成された世界を表現していました。電車の窓を模したLEDライトを使うことで、場面転換すら利用していることや、音響の高度な技術には、とりわけ驚嘆しました。役者一人一人がの静かでていねいな演技と、スタッフの息が合っていないと、このような完成度の高い作品は作れないと思います。その点でも見習いたいと思いました。 講評委員会では、作中に多々登場する詩の引用を、もう少し「引用」とわかるように際立たせることが必要ではないかという意見が出ました。また、セリフのリズムが終始一貫しているので、少し変化があれば、より聞きやすかったという意見も出ました。また、本や手紙、岩塩などの小道具を使う場面がもう少しあると、より印象的だったのではないのでしょうか。 客への魅せ方を役者・スタッフ全員が知り尽くしていないと、ここまで素晴らしい作品にはならないと思います。高校生の創作とは思えないほど美しく、引き込まれました。また、抜群のスタッフワークにも、同じ高校生として学ぶ点が多くありました。 聖霊高校の皆さん、お疲れ様でした。	

一見普通ですが、どこか変わった人たちが出てくる劇で、「普通とは何か」を考えさせられるお話でした。登場人物の個性がしっかり表現できていて、思春期に誰もが抱えるコンプレックスや、大人の男性の心の葛藤など人間味のある劇でした。物語はとても淡々と進み、それがとても日常らしかったです。淡々とした登場人物が、かえって大きな痛みを抱えているようでした。役者の演技力は、頻繁に挟まれるユーモアで笑わせつつ、そこに登場人物の心の痛みを表すという、とても高度なものでした。場面の転換までお客に見せる工夫がされていたことも良かったです。ただ、キャストが立ち位置に移動するときや、舞台袖に捌けるときなど、照明の明かりが当たってしまい、作業をしている人に目が向いてしまう時がありました。それならばいっそ、小道具を出したりはけたりするときもすべて役になりきる（例：小春がコップを持ってきていましたが、たとえ暗転中だったとしても明子がおぼんなどと共にコップも持ってくる）と、より完成度が高くなるのではないのでしょうか。その他、講評委員会で話題になったことは、最後のサスが何を表しているのかということ、劇の終盤かけて音響が多かったという点です。音響は、だんだん色づいていくアキラの心境を表しているのではという意見、後半に少し音が多かったのではという意見もありました、「ゆうやけこやけ」の音楽をもっと長くしたり、最後の音をもう少し流して、お客に余韻を残してもよかったと思います。

一風変わった登場人物は、私たちみんなを表しているようで、すべての人に対する温かい視線を感じられる劇でした。大同大学大同高校の皆さん、お疲れ様でした。

誰かに気持ちを伝えるのは難しいものです。わかりきったことですが、そのことを改めて感じさせ、考えさせてくれる劇でした。タイトルの「青いひまわり」は何を表しているのだろうか、講評委員会では議論がはずみました。ひまわりの花言葉や、それにまつわる神話が物語に組み込まれており、非常に興味深いという意見が出ました。「青い」という言葉が「若い・幼い」という意味にもなることから、向日葵が成長していく様子を表しているようで面白かったという意見も多く出ました。

ただ、登場人物全員が優しい心の持ち主であるが故に、高校生らしい感情の衝突がなかったのが、惜しい点でした。女性が女性を好きになるという葛藤をより深く描くなど、登場人物の感情の機微を、もっと表現できるとよかったのではないのでしょうか。お客がそれぞれの人物をより深く理解できるように、間の取り方、声のトーン、動作などで、人物の個性や心境の変化を表現すると、より観客を引き込む劇になると思いました。また、衣装で人物の差別化を図ったり、ユーモアを盛り込むと、さらに魅力的な劇になると思いました。最後の花火シーンは初めて見る表現方法で、斬新かつ素敵なアイデアだと思いました。せっかくなので、その花火のシーンや、最初の絵を描いているシーンで、タイトルの表す意味をお客が読み取れるようにすると、より劇に厚みがでるのではないかと思います。

向日葵があおいからの言葉に戸惑い、自分の感情を表現できずに悩む様子には、とても共感できました。感情の表現に苦しむ時期である高校生にとって切実な、それでいてとても綺麗なお話でした。

鶴城丘高校のみなさん、お疲れ様でした。

愛知高等学校	牡丹灯籠
この作品は、江戸時代を舞台にして、人間と幽霊となった女性の悲恋の物語を通じ人間らしさや人を慕う気持ち、そして欲望といった時代を超えた普遍的なテーマが伝わってくるものでした。 キャストの演技は一つ一つの動き、所作がとても綺麗で声の響きも良かったが、時々台詞が現代の言葉遣いになる部分があり、気になりました。また夢の中で父親が新三郎とお露を切り捨てる場面や、笑い方の演技についてはリアリティーが出し切れていないという意見もあった。原作は落語であるということもあり、江戸っ子らしい歯切れのよい言葉遣いにするなどキャストの演技に落語らしさがあると良かったのではないかと思います。 脚本の面では、怪談話ということで季節感のある台本選びでしたが、怪談が中心なのか、恋愛の物語が中心なのかということが、はっきりしていないという意見がありました。特に終わり方については、新三郎が死んだ理由がはっきりとせず、本来の作品の展開が十分に伝わり切らなかったのではないかと、本来怖いはずのところがあまり怖くなく感じたので、もっと恐怖感を与えるような演出をするとより面白い作品になるのではないかと意見もありました。特に灯籠を持った二人が歩く場面には、もっとインパクトがあると良かったと思います。 装置についてはクオリティーが高く、時代感も出ていて良かったのですが、装置の配置によって演技の多くが上手に寄った状態で行われることになり、中央のスペースが空きすぎていて物語の中心が分かりづらいという意見がありました。また、上手側の部屋は様々な部屋に見立てて使われていたが、小道具等でより部屋の違いを分かりやすくすることができたのではないかと指摘もありました。 照明については、とてもきれいにまとまっていて良かったと思います。ただ、怪談ということで仕方ない部分はありますが、全体にあまりに暗かったため、昼の場面はもっと明るくすることで、夜の場面の暗さがより際立ったのではないのでしょうか。細かいところ言えば、伴蔵夫婦と幽霊と一緒に現れる場面では照明の色を変えるなどした方がより効果的ではないかという意見や、灯籠の場面でのSSの光が上手側の部屋にこぼれていることが気になるといった意見がありました。また暗転による場転が多くありましたが、その中で重要な人物が暗転後に動いて物を運んでいるということが何度かあり、戸板や幕を使うなどして目隠しした方が観客の興を削がないのではないかと指摘もありました。 音響の面では江戸時代が舞台でありながら様々なジャンルの音楽が使われるということに、賛否両論あり、時代を統一した方が良かったという指摘もあれば、民族音楽などを使うことは良かったが、その中でピアノ曲を使うことできれいにまとまり過ぎた印象を受けるといった意見がありました。 この作品は江戸時代を舞台にしたものであり、かつ怪談という高校演劇としては珍しいジャンルのものでしたが、レベルの高い演技によって劇に入り込んで共感しながら見ることができました。 愛知高校の皆さん、お疲れ様でした。	

岡崎学園高等学校	リーちゃん三世
この作品は、口蓋裂をもって生まれた主人公が自分のコンプレックスやそこから来る様々な悩みを、周囲の友人や両親にぶつけながら、自分の心の中の闇に向き合って成長していくという物語であった。脚本については作者の実体験をもとにした現実味のある内容で、思春期ならではの悩みや、様々なコンプレックス、そしてそのために周囲にあたってしまう主人公の様子など、私たち高校生にとってもとても共感できました。特に「苦しんでいた思春期の自分を殺さないで」という言葉は胸に刺さりました。 キャストは声量滑舌ともよく、台詞はよくききとることができました。特に理沙とコロスの掛け合いは、目が離せなくなるほど見入ってしまいました。コロスたちは男性で構成されていたこともありとても迫力があって、恐怖を覚えるほどでした。一方で、その迫力で理沙、ゆめみ、マナとも圧倒されてしまっていて、マスクを捨てる場面も負けている印象を受けたので、そこでは理沙たちが際立つような演出上の工夫があるとなお良かったのではないのでしょうか。 装置についてはとてもシンプルでわかりやすかったのですが、舞台がやや広すぎる感じもあったので、パネルやホリ、袖幕などを使ってもよかったのではないかという意見がありました。また、奥の平台はコロスのシーンでのみ使われていましたが、コロスをはけずにずっとそこにいても良いのではないかという意見もあがりました。見切れる位置においてあった椅子などは、どうせ見せるのであればいっそ暗転ではなく明転のまま場転をした方が観客の集中も途切れないようにできたかも知れません。 小道具衣装の面では、この劇のカギとなる小道具はマスクだったのですが、コロナ禍の今マスクを付けていることがむしろ当たり前になってしまい、特にマスクを外すよう執拗に要求する先生の言葉には違和感を覚えました。既成台本なのでやむを得ない面もありますが、台詞を少し変える、または理沙のマスクを普通と違うものにするなど、コロナ禍で上演するということを意識した工夫があってもよかったかも知れません。 照明については、はじめと終わりのシーンは暗い感じや青いホリが良い雰囲気を出していました。一方で日常の場面の照明は広いナマ明かりだったので、エリアを絞るなどして観客の視点を誘導するなどの工夫があるとよかったのではないかと思います。また特に指摘が多かったのは、「何か変ですよ、理沙先輩の口。」という後輩の言葉を理沙が聞いてしまう場面で、単サスを使うことで理沙にその声が聞こえていないように見えてしまうのではないかという点でした。 全体として、思春期の悩みやコンプレックスに向き合う力を与えてくれるような劇でした。岡崎学園高校の皆さん、お疲れさまでした。	

愛知県立一宮高等学校	こんばんは、太陽
「差別」「偏見」「固定概念」…現代的なテーマを童話のように表現している劇でした。横と奥行きだけでなく高さを使った装置は、劇団四季を彷彿とさせる出来栄でした。その装置の外観や役者の衣装、祭りの飾り付けなど、一つ一つで世界観を統一し、とても入り込みやすく観やすい劇になっていました。特に絶賛されたのは、舞台の各所に配置された箱のデザインです。面で覆わず透け感を出していたところが、うまいと思いました。役者の大きな演技や連携の取れた動き、テンポの良さなど、凄まじい表現力に圧倒され、1時間があっという間でした。音響も自然で引き込まれました。 講評委員会では、ネメシアはどこに住んでいるのか、権力者の家庭に育ったヘーゼルなのに、なぜ元から差別意識がないのかなど、お話の根幹に関わる疑問点が浮かんでしまうことが惜しいという意見が出ました。他にも、村人たちの動きにも変化、工夫がされていれば、主要な人物が一層際立って見えたという意見もありました。 タイトルに関しては、夜と昼のように相反する考えを表していると感じました。物語中、夜に祭りを始め、太陽に祈りを捧げているところも、同じことを表現しているものだと思います。登場人物の名前のほとんどが植物の名前が由来で、性格や境遇もその植物、花の花言葉が元になっていると気づき、思わず唸りました。 一つ一つしっかりと考えられていて、創作の作品とは思えないような、安定感とメッセージ性を感じる作品でした。 一宮高校の皆さん、お疲れ様でした。	

愛知県立刈谷東高等学校	笑ってよゲロ子ちゃん殉情編 高校演劇バージョン
人の底知れない欲望や変わるものと変わらないものについて考えさせられる、今でしか見ることのできない演劇でした。 演出に関しては、舞台の上の二人が向かい合わず台本を持ったまま、黒い舞台に黒い衣装のままで朗読劇か稽古中のような演出で進行する様子で、シンプルにテーマを投げかけるとともに今の高校演劇が置かれている厳しい状況を訴えるような演出でした。以前に多人数で演じられた台本とテーマを同じくして表現が大きく違う演出は、以前の形を知っている人ほど訴えられている様々なメッセージを読み取ろうとして深く考えさせられます。決まった正解はなくどのようなにも捉えられてしまう劇は、観客を非常にとまどわせます。逆にはっきりと具象化し演出の意図を明確にする形でも観客をひきつけられるでしょう。 舞台装置に関しては、ソーシャルディスタンスを強く意識しながら、最小限で印象を強く残せるものでした。一方でシンプルすぎると演劇をする側が見せたいものとする側が受け取った物がずれることもあります。シンプルな舞台はまるで稽古中の様子を表しているようにも見えるので、始まってから少しずつアイテムが舞台に置かれていき最後には本番の舞台になる、というような演出をしてもおもしろいでしょう。またBGMとして使用された楽曲は登場人物の心情と強くリンクして舞台を大いに盛り上げていました。 演技に関しては、主役の二人の違いを明確に表現していました。高圧的で強欲に変わっていく上司と着ぐるみを着ても心は初心を忘れず無垢なままの部下、という対比がなされ、特に着ぐるみを着ているようにみせる演技の巧みさがシンプルな舞台の上で印象的でした。台本を読みながら必要な場面だけで演技をする、という形は観客に自由に想像させる幅の広さがありますが、中途半端になる可能性もあります。演技をもっと大胆に盛り込んでもよいでしょう。 人の心の暗い部分を描き、観客にさて自分はどうなんだと考えさせ、明るい部分を描きながらどこか純粹であることの恐ろしさを見せ観客を強く揺さぶる演劇でした。 刈谷東高校の皆さん、お疲れさまでした。	

愛知県立旭丘高等学校	水面の月
幻想的な雰囲気、一つの世界が構築された作品でした。舞台は白を基調に統一されていました（床全体を白くすることも選択肢の1つではないかと感じました）。幕開きで映された水中の映像、吊り物の白い布（透け感が違うものを使い、舞台上の自然風によって揺れることも計算の上でしょう）、役者のたゆたうようなしぐさや話し方が相まって、お客も水の中にいるような、記憶の海に揺られているような、「お客を引き込む」効果を上げていました。布や、海月の衣装のふわふわと揺れる様子は「アイデンティティの揺れ」をも表しているのではないのでしょうか。 暗転の長さ、幕の開閉の多さ、暗転中の役者の動きが素に戻っているように見えてしまったことが、その効果を削いでしまっていて、少し残念でした。白一色の衣装は、暗闇の中でも特に動きがよく見えます。場面転換中、いかにお話の流れを途切れさせないかが、今後の課題だと思います。ただし、急遽、発表会場が変更になったことで、事前に準備していただけた効果を上げることが出来なかったのではないかと想像します。アクシデントをはねのけ上演を成功させたことに、心から尊敬の意を表します。 「ありのままでいい」という言葉が随分前に流行りましたが、ありのままの「わたし」とは誰か。そのような、自分でもわからない「わたし」を、誰が受け入れてくれるのか。唯一無二の存在でなければならない、人より抜き出ないといけない…画家である主人公の苦悩に、すべての人の苦悩を読み取ることができる劇でした。 旭丘高校のみなさん、お疲れさまでした。	

桜丘高等学校	ラスト・パス
この劇は、バスケットボール部のエースとボッチャの選手である体が不自由な高校生との友情を描く爽やかな物語でした。オープニングの、音楽に合わせてドリブルをする選手たちのシーンから一気に観客を引き込み、そのまま観客の注意を途切れさせることなくエンディングまで駆け抜ける演出、演技は圧巻の一言に尽きています。キャストの発声、滑舌、身のこなしについても、一言一言の台詞、一挙手一投足にも魂がこもった熱演でした。登場人物が多いが、それでも一人一人の個性が際立ち、目立つべき場所でだけしっかり目立つことで、中心となるストーリーをぼやけさせない工夫ができていました。この劇の最大のポイントはそのライブ感でした。バスケのシュートやボッチャの投球も見事に決め、更に試合の結果次第で台本の展開が2パターン想定されているなど、観客も一緒に緊張するような劇でした。 一方でストーリーについては、ボッチャの試合があっさりと進んでいくことで、駆け引きの部分が描き切られていないことや、最後に車椅子から立ち上がることで、主題がぼやけてしまうのではないかという指摘もありました。また試合の緊張感がよく伝わってくる分、試合にばかり注意が引き付けられてしまい、本来メインであるはずの二人の関係性が十分に伝わってこないという意見もありました。何を伝えたいのか、そのためにどうすることが効果的なのかという点について、更に議論を深めてもらえばより良い脚本になるのではないのでしょうか。 大道具は実物のバスケットゴールのみでありましたが、必要十分にしてお使いいただき、効果的でした。照明もバスケットゴールを光らせていたり、バスケの試合とボッチャの場面を同じコートを使いながら照明の切り替えとストップモーションだけで切り替えるなどの工夫が見事でした。ストーリーとも関連することですが、ラストシーンは現実ではなく、登場人物が思い描いている夢であろうというのが講評委員会での意見でした。その印象は、特にラストシーンがホリのシルエットで始まることで受けたものでしたが、次第に前明かりが足されていくことで、現実のできごとのように見えてしまった。そのため、最後に車椅子から立ち上がることが、唐突に思えてしまったともいえる。もしラストシーンが空想の場面なのであれば、最後までシルエットのままにする、あるいは最初から立って医者として登場するなどの方法もあったのではないだろうかといった意見があがりました。細かい部分で疑問点はあったものの、全体としての完成度は極めて高く、非常に見ごたえのある劇でした。 桜丘高校の皆さん、素晴らしい劇をありがとうございました。	

愛知県立尾北高等学校	話半分
この物語は、太平洋戦争中に電話交換手となったミドリという少女が、聞こえないはずの右耳で死者の声を聞くというもので、タイトルは話を半分に聞くという以外に、この“片方の耳が聞こえない”ことと、“半分はおとぎ話”であるということを表しているようです。舞台は2階建ての構造で1階中央が電話交換室、その左右に階段があり、2階は飾りのないフラットな平台となっていました。実は、下が現実の世界を、階段から上が死者の世界を表わしているのですが、最初はそのことが示されず、物語が進行していく中で明らかになっていく仕掛けになっていました。ただ、階段が何を表しているのか分かりづらく、また舞台を狭くしてしまって上手く活かせていない印象を受けました。ミドリが左右の耳でこの世とあの世の声を聞き分けるという設定を活かすのなら、例えば下手側を死者の世界、上手側を現実の世界というように使い分けた方が解りやすくなったかも知れません。 演技については、舞台前方での芝居は発声も聞き取りやすく、特に主演のミドリ役は長いストップモーションでも瞬きもせず、熱演が伝わって来ました。死んだ兵士のシゲル役も頑張っていました。ただ、声を張り上げてのセリフがやや聞きづらい点が気になりました。衣装は当時の雰囲気をよく再現しており、小道具も特にブレスト（送受器）などにこだわりが感じられました。音響や照明も工夫がされていましたが、戦場の爆発での閃光や音、飛行機の音などがさらにリアルだったなら、もっと臨場感が出たかも知れません。 以下は脚本に対する疑問点であり、この上演そのものについてではありませんが、テーマそのものに関わると思いますので、述べることにします。聞こえない耳で聞こえないはずの声がかかる、というアイディアは秀逸で、しかもそれを戦時中の電話交換と絡めた所にこの芝居のミソがあります。また、話を鵜呑みにして信じることの危うさを、戦中は戦争を賛美しながら戦後は平和を唱える民衆を描くことで浮かび上がらせ、意外にも“話半分に聞く”方が騙されずに済むことを示しています。しかしそれは様々な意見に耳を傾けるだけで良いのではなく、最後は自分で判断する、ということが含まれなければならないはずです。脚本にはその点が必ずしも明確に描かれていなかったのではないかと。ミドリも、死者の声を聞けるという能力がありながら、またシゲルも実際に戦場で死ぬという“経験”をしながら、2人の発言が戦時中に植え付けられた価値観から脱するに至っていないことは、結局このような悲惨な体験から何も学べていない、ということになるのではないかと。とは言え、戦争を題材に取り上げ、現代に生きる人々、特に高校生に考えさせる話を作り上げたという点で大いに賞賛されるべきで、決して“話半分で”受け止めていい芝居ではありません。 最後に、今回のこの舞台を、一般の高校生に観劇させられなかったことが残念でなりません。ですが、これにめげずにさらなるブラッシュアップを試みられることを切に願います。尾北高校演劇部のみなさん、お疲れ様でした。	

日本福祉大学附属高等学校	答辞
日本福祉大学附属高校の劇作の印象は、音響の選曲のセンスが良く、オペが繊細な部活でした。その伝統が今回の上演にも遺憾なく発揮されていました。特に出色だったのは、エンディングの着信音からピアノのBGMをフェードでかぶせるオペです。聞き心地が良かったです。前半の台詞にかぶせるピアノのレベルはちょっと高めでした。台詞を心地よく聞かせるレベルを追求して下さい。照明も工夫が凝らされていました。早朝を表現するために、オープニングはシーリングをちょっと絞ってフロントブルーとアンバーを用いてそれから徐々にシーリングナマを全開というプランだったと思うのですが、下手シーリングが急にフルになった感じがありました。オペレーションは音響同様、繊細さが求められます。今後もいろんなバリエーションに挑戦して下さい。 さて、演技・演出です。芝居が主人公の成長を描くとするものならば、正味1時間での成長を見事に描ききっていると思います。講評委員会では、前半の主人公の臆病さを感じるとの意見が出ていました。卒業に臆病だった主人公が胸を張って卒業式に向かっていく過程をキャスト・演出が描ききった証左と言えるでしょう。淡々と流れる前半から流れが一気に加速するきっかけとなるのが主人公の「卒業したくない」三連発です。ここから、主人公の背負っているものが徐々に描き出されていく。その苦悩が演劇部の明るい彼女と対比させながら、あぶり出されていきます。メインの2人のキャストがそれをリアルに演じていく。君たちは相手の視線をしっかりと捉えてさりげなく演じることがとてもいい。 随所にある沈黙も利いていました。同じ間合いで自分の順番だから台詞を言ってるような芝居を君たちはしない。心の流れを十分感じさせてくれました。台詞のやりとりだけではなく、主人公のマスクをはずす仕草、ピンを机に置く所作、気持ちを込めて演題に回れ右をするスピード、これは演出なのか、キャストの技量なのか。ただ演出だとしても君たちはきっと無数のバリエーションを持って、この芝居を描くはずだという期待を持っています。かつては生き生きとした芝居が多かったですが、やはり型にはまらない、無数のバリエーションを見せてくれるはずだと思うさせるキャストの素直な気持ちが滲み出るような芝居でした。 日本福祉大学附属高校の皆さん、お疲れ様でした。	

愛知芸術高等専修学校	臥薪 SHOW 誕！-REVENGE-
2020 年初め、世界に襲い掛かったコロナ禍は、演劇部員の皆さんの活動にも大打撃を与えました。春夏の大会中止、無観客開催、新しい生活様式の中での練習及び上演。そしてそれは今日も続いています。今大会最後に上演されたこの劇は、コロナ禍での演劇部の物語を真っ向から扱った唯一の劇でした。厳しい感染症対策を求められ、練習すらままならなかったり、メンバーの気持ちが揃わなかったりと、次々と困難が襲い掛かる演劇部。部員たちは悩み、くじけそうになりますが、諦めずに知恵を出し合い協力者を探し、ついに打開策を見出して大会での上演を果たします。ラストの劇中劇は、未知の病をまん延させた悪役・新形殺那（新型コロナ！）に立ち向かう、くノ一おりんと科学者イシマツのコンビの痛快コメディ活劇で、まさに演劇部がコロナと戦い未来を見出すドラマになっていました。 大道具はなにもない舞台でしたが、ソーシャルディスタンスを意識した劇づくりがされており、キャストの立ち位置は、舞台の幅や奥行きを十分に使って常に間隔を維持していました。音響や照明も最小限にとどめる一方、映像や劇中劇の必殺技などの言葉をプロジェクターで大きく表示したり、悪役の出現や退場を引割幕で表したりと、素舞台だからこそできるダイナミックな演出でした。キャストは、一人一人の役の個性をよく理解しており、特にミレイ役は気持ちの強弱を全身で表す熱演でした。キャスト同士の対面での会話を避けつつ殺陣を行うシーンでは、舞台上のキャストの動きに花道のスタンドマイクで生アテレコをするというアイデアが使われ、息の合ったアテレコが表現できていました。ギャグセンスもよく、観客は終始楽しく見ることができました。 距離を取ったまま演技する方法を追求するという「いま」を描く劇であった反面、演劇部員が議論するシーン等でマスクを外す動作があったり、「ソーシャルディスタンス」や「飛沫防止」が劇中劇で悪役が繰り出す技として設定されていたりする点には、引っ掛かりを感じました。これらは演劇においては障害に思えてしまう一方で、本来は感染拡大を防ぎ人々を守るためものです。その両側面を描けると、「いま」を描く劇としてより真に迫ったものになるのではないのでしょうか。 サイドスポットを使ったシーンで、キャストが陰に入ってしまう動きが見えづらかったので、位置を慎重に調整しましょう。暗転中、プロジェクターの光が舞台に当たっていたので、キャストも完全暗転ではないことを意識した動きを取るとよいでしょう。また、身体の動きが小さかったり、声の音量や抑揚が少なかったりするキャストは、主役との差が目立ちました。これらを改善し効果音や文字の出し方にキレが出ると、見せ場がさらに盛り上がるはずです。 劇全体を通して、演じる部員たちの「コロナに負けたくない」という思い、そして演劇が大好きだという熱意が全力で表現されていて、高校生の共感を呼ぶような、青春のひたむきさ、爽やかさがありました。 愛知芸術高等専修学校の皆さん、お疲れさまでした。	